令和３年３月発行

Let's農業

第42号

・・・**もくじ**・・・

・「水田での高収益作物導入について」
（一社）畑地農業振興会参与 菖蒲淳氏に聴く ・・・・P.1
・今注目のスティックセニョールとブロッコリー・・・・P.4
・優良な経営体の事例を紹介・・・・・・・・・・・・・・P.7
・国営かんがい排水事業「北総中央地区」が完了・・・・P.10
・令和３年度水田活用の直接支払い交付金の見直し・・・P.11
・ほ場整備による排水改良・・・・・・・・・・・・・・・P.12

＜編集・発行＞
関東農政局農村振興部農地整備課
さいたま市中央区新都心２－１
ＴＥＬ：048-600-0600

◇表紙◇
今回はブロッコリーの特集ということで、ブロッコリーブーケを作りました。
ブロッコリーの花言葉は「小さな幸せ」、紫のスイートピーは「永遠の喜び」、ヒペリカムは「きらめき」です。これから新年度を迎える皆様が幸せでありますようにとの思いを込めました。もちろん、撮影後はおいしくいただきました。

トピックス

「水田での高収益作物導入について」

一般社団法人畑地農業振興会参与　菖蒲 淳 氏に聴く

農林水産省では、主食用米の需要が毎年減少傾向にある中、水田農業の高収益化を推進し農業・農村の活性化や担い手の支援に取組んでいます。水田での野菜や果樹等の作物への転換等にあたっては、関係者がよく話し合って合意形成を図り、栽培技術の確立、労働力の確保、基盤整備や施設・機械の導入等を検討しながら取り組むことが重要です。

また、水田農業の高収益化は労働生産性の観点からも検討が必要です。国営事業地区では、事業後の作物の栽培方針を営農計画として整理しており、水田農業の高収益化を目指しています。

今回、農業農村整備事業地区での取組に幅広い見識をもつ、一般社団法人 畑地農業振興会参与で青山学院大学でも非常勤講師をされている菖蒲氏に「水田での高収益作物導入について」というテーマでお話を伺いました。

農業の現状と導入上の課題

水田での稲作中心農業から、野菜等の畑作物への転換は、生産者にとって大きな決心を求めることになるであろう。野菜作りは、それなりの品質の物を、しかもばらつきなく作ることが求められる。稲作専作の生産者であると、数年かかると言われている。水田での野菜作りを始めるには、まず作物選択から始まり、湿害や病害虫を含む栽培技術の習得、売り先も様々な選択肢がある。機械や調製のための施設など、それ相当の投資も必要となる。収穫や調製では人手が必要で、パートさんを雇わなければならない生産者は多い。水田稲作に比較すると、考えるべきことが格段に多く、当初は気が遠くなるのではないか。そういった生産者の実情を考えると、簡単には畑作への転換を求めることができなくなる。

財政面から野菜への転換が重要

一方、みずほ総合研究所（2018）によると、農業所得に占める補助金と共済の割合は、この2004年から2016年の平均で、米等の水田農業は約74%と税金に大きく依存している。

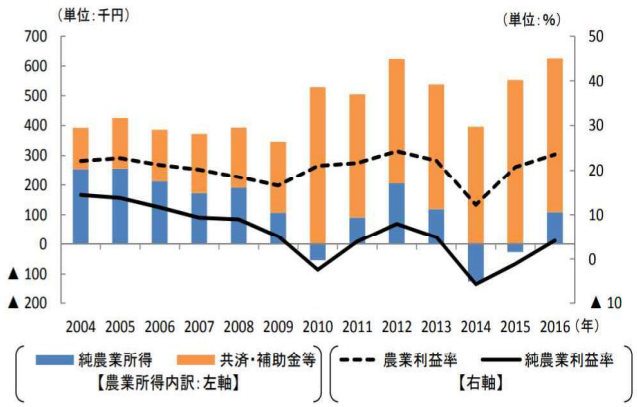
しかし、野菜作は12%と経済学的に言うならば、市場歪曲性の少ない健全な商品である。この差は、ここ数年では更に大きくなっている。つまり国の政策として、水田稲作から野菜作への転換を図ることは、需要に応じた農産物の生産を進めることであり、更には日本の財政健全化という観点で有効であり、現在の政策課題の柱一つであることは間違いない。

こういった背景の下で、国及び地方の行政関係者は、農家の実情を知りつつ、国の政策を推進することが求められ、難しい立場に置かれていると思わざるを得ない。必要なのは、近代経済学の祖と言われるアルフレッド・マーシャルが言った「cool head but warm heart（冷静な頭脳と温かい心）」なのではないか。国の政策を冷静に推進しつつも、農家のおかれた状況を理解し、寄り添っていくことだと考える。

農家や現場からの声

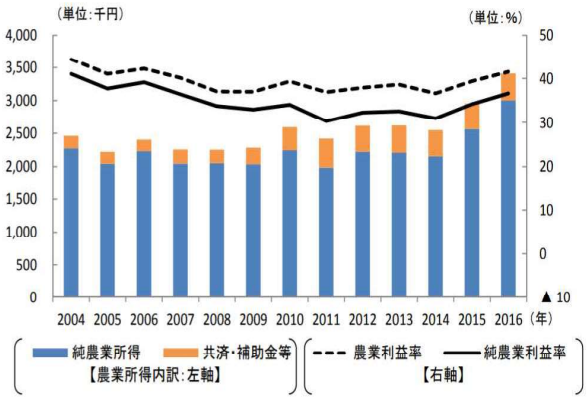
現場で農家を始め関係者から取材すると、何気ない声や意見から、行政組織が進めている政策の欠落している点が指摘されたり、また農家

<参考図表1：水田作の農業所得・農業利益率等の推移（1経営体当たり平均）>



（資料）農林水産省「営農類型別経営統計」（個別経営）より、みずほ総合研究所作成

<参考図表2：野菜作の農業所得・農業利益率等の推移（1経営体当たり平均）>



（資料）農林水産省「営農類型別経営統計」（個別経営）より、みずほ総合研究所作成

表－３　品目別１０ａあたり農業収支（露地）　　単位：千円／１０ａ

	農業収益	農業経営費	農業所得		農業収益	農業経営費	農業所得
だいこん	315	175	140	にんにく	576	311	265
にんじん	356	202	154	きゅうり	1,773	588	1,185
さといも	412	151	261	なす	1,803	577	1,226
はくさい	321	197	124	大玉トマト	1,540	637	903
キャベツ	392	210	182	ミニトマト	1,787	985	802
レタス	476	242	234	ピーマン	1,427	532	895
ほうれんそう	342	160	182	ししとう	2,005	577	1,428
白ねぎ	680	278	402	メロン	541	254	287
青ねぎ	865	361	504	すいか	588	330	258
たまねぎ	322	211	111				

資料：平成１９年度農業経営統計調査結果　農林水産省

の実情を如実に表していたりする。つまり、一つ一つの声を注意深く聞き、それらが何を言いたいのかを、反芻してみることも大事である。

ここでは、生産者からの二つの言葉を紹介したい。どちらも、しばしば耳にするのである。一つは、「子供を上の学校にやらなければいけないので、稼がなくては」、二つ目は、「野菜が高収益作物だというが、そうは感じられない」というものである。

一つ目の「子供を上の学校にやらなければいけないので、稼がなくては」という言葉は、特段、水田畑地化の状況に限らず、しばしば農家から聞かれる言葉である。農業は農家にとって、人生そのものである。就農したての若い農家は、まずは生産技術を磨き、経営のノウハウを習得してゆき、将来にそれなりの夢を持っている。

その後、家庭を持ち子供ができると、家計支出も増え、実際に農業収益を増やす必要性ができ、単なる夢から使命感をもって農業に向かい、収益の拡大に励む。今回の言葉はこの時期の状況を現したものである。その後高齢になると、体力的にも限界を感じつつ、また意欲も縮小していく。農業に対する姿勢の変化は、農業への新たな投資、リスクの受容に表れ、農業そのものに反映していくことが感じられる。統計的な根拠はないが、農家のライフスタイルと農業という生産活動は、密接に連関していると思う場面によく出くわす。つまり、農業を転換するにも、農家には動機が必要であり、それはあくまでも極めて個人的な問題で触れることのできない領域であるが、行政関係者もそこに思いを寄せることは必要であると考えられる。

二つ目の言葉は、「野菜が高収益作物だというが、そうは感じられない」というものである。これは、とあるJAの部長さんを始め、農業を熟知している篤農家からも発せられた言葉である。当然のことながら、農業の世界でも、ローリスクハイリターンの都合の良い作物などありえない。となると、高収益作物とはハイリスクなのかとも考えられるが、それほど簡単な意味ではなさそうである。

高収益な作物とはなにか？

農林水産省の統計データによると、白ねぎ等の蔬菜類や人参等の根菜類の反当りの収益は、15～40万円であるのに対し、米は3～4万円である。

その差は歴然である。しかし、皆さんの一般的な知識通りで、野菜は人手が必要で、自営労働時間は、同様に反当りでは100～300時間必要であるのに対し、米では10～20時間である。

これらは、反当りの比較で、現実を反映できていない。やや積極的な畑作農家の畑1ha、米5haの場合を想定して比較すると、農業所得は、白ねぎ約400万円、はくさい120万円、たまねぎ110万円、にんじん160万円であるのに対し、米は5haで180万円となる。つまり品目にもよるが、米と野菜の収益に大きな差はなくなる。

また、家族経営で、水田での規模を目一杯大きくする限度は機械等の関係で、30haと言われている。そこまで大きくすると、収益は1160万円となり、野菜の1haの収益を大きく上回ることとなる。

つまり、水田稲作も、経営の仕方によっては、高収益となりうるということである。また、当然統計データはあくまでも多くの農家の経営データから平均化したものであることから、より効率的な経営をする農家は、統計データの収益よりももっと高い収益を上げている。結論としては、野菜＝高収益作物という通り一遍の解釈ではなく、規模を大きくしたり、効率的な経営を工夫したりすることが、高収益につながるという、これまた極めて無難な解釈に落ち着くのである。先のJAの部長さんや篤農家の言葉は、ある意味真実を物語っているのである。

以上様々なことを述べたが、高収益作物への転換は簡単ではないが、行政関係者の皆さんは、そういった困難な仕事を生産者にお願いする以上優しく背中を押すような感覚が必要なのではないかと思うのである。

（参考資料・統計）
1．みずほ総合研究所、「データに見る日本農業の収益力」2018年、https://www.mizuho-ri.co.jp/publication/research/pdf/insight/pl180301.pdf
2．平成19年度の品目別経営統計
3．平成28年の個別経営の営農類型別経営統計（水田作経営）